1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和4年7月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- ●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万0165トン、前年同月比90.7%、価格は1キログラム当たり252円、同109.3%となった。
- ●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5599トン、前年同月比88.9%、価格は1キログラム当たり225円、同111.9%となった。
- ●東京都中央卸売市場における指定野菜14品目の価格のうち、平年を下回ったものは、ばれいしょ(平年比59.1%)、さといも(同74.3%)、レタス類(同76.5%)、なす(同87.0%)、はくさい(同87.5%)、きゅうり(同92.6%)、ピーマン(同92.7%)、キャベツ類(同97.2%)、ねぎ(同98.5%)、平年を上回ったものは、たまねぎ(平年比153.0%)、だいこん(同148.1%)、にんじん(同115.9%)、ほうれんそう(同104.6%)、トマト(同103.6%)となった。
- ●今年は梅雨明けが早く、全国的に6月は高温に見舞われ、8月に入って再び全国的に猛暑となった。夏秋野菜と高原野菜はシーズンが終わってみれば不作年の結果となっていると予測される。市場到着後にダメージ(傷み)の発生が多くなることも心配される。市場では一般的に「品物が悪いから高値になる」といわれる。8月から9月にかけても、想定した品質でない場合が多いと予想され、出回り量が少なく高値の展開が続くと予想している。

(1) 気象概況

上旬は、東・西日本太平洋側は、旬のはじ めは、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多 かったが、旬の中頃からは、台風第4号や低 気圧、気圧の谷の影響で曇りや雨の日があっ た。また、5日は高知県で線状降水帯が発生 するなど、旬の中頃は、西日本太平洋側を中 心に大雨となった。北・東・西日本では、暖 かい空気に覆われやすかったため、旬平均気 温はかなり高く、特に北日本では平年差が+ 3.2℃となり、1946年の統計開始以降、7月 上旬として1位の高温となった。また、旬の はじめは、東・西日本を中心に広い範囲で猛 暑日となり、1日は群馬県桐生市で40.4℃な ど、アメダスを含む6地点で 40℃以上の日最 高気温を観測した。旬平均気温は、北・東・ 西日本でかなり高く、沖縄・奄美では平年並 だった。旬降水量は、北日本日本海側でかな り少なく、北日本太平洋側と東・西日本日本 海側で少なかった。一方、西日本太平洋側で 多かった。東日本太平洋側と沖縄・奄美では、 平年並だった。旬間日照時間は、北・東日本日本海側でかなり多く、北・西日本太平洋側と西日本日本海側で多かった。東日本太平洋側と沖縄・奄美では、平年並だった。

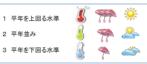
中旬は、北・東・西日本と奄美地方では、前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多かったため、旬降水量は北・東日本太平洋側でかなり多かった。暖かく湿った空気が流れ込んで、大気の状態が不安定となった日があり、各地で雷雨や大雨となり、猛烈な雨が降った所もあった。旬平均気温は、沖縄・奄美でかなり高く、北日本で高かった。東・西日本では、平年並だった。旬降水量は、北・東日本本海側と西日本太平洋側で多かった。一方、沖縄・奄美で少なかった。旬間日照時間は、北・西日本海側と北・東・西日本太平洋側で少なかった。東日本日本海側と沖縄・奄美では、平年並だった。

下旬は、東北北部では、26日ごろに梅雨明 けしたとみられる。東・西日本では、高気圧 に覆われて晴れた日が多かったが、旬のはじ めは低気圧や前線の影響で曇りや雨となり、 その後も湿った空気が流れ込んで大気の状態 が不安定となって、雷雨や大雨となった所が あった。旬平均気温は、東日本と沖縄・奄美 で高かった。北・西日本では、平年並だった。 旬降水量は、北日本日本海側でかなり少なく、 西日本日本海側で少なかった。一方、沖縄・ 奄美で多かった。東日本日本海側と北・東・西日本太平洋側では、平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と北・東日本太平洋側で多かった。東・西日本日本海側、西日本太平洋側と沖縄・奄美では、平年並だった。旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

		平均気温			降水量		日照時間								
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬						
北日本				7		太平洋側 計	A A A A A A A A A A A A A A A A A A A		P P P P P P P P P P P P P P P P P P P						
東日本				太平洋側			太平洋側 日本海側	太平洋側 本	太平洋側 美						
西日本				太平洋側		太平洋側 日本海側	b d d d d d d d d d d d d d d d d d d d								

資料:気象庁「7月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

7月の東京都中央卸売市場における野菜全

体の入荷状況は、入荷量は11万0165トン、 前年同月比90.7%、価格は1キログラム当た り252円、同109.3%となった。(表1)。

表 1 東京都中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量	前年比	平年比	価格	前年比	平年比	価格	(円/kg)の	推移
四 日	(t)	(%)	(%)	(円/kg)	(%)	(%)	上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,165	90.7	91.9	252	109.3	99.3	247	256	252
だいこん	6,231	86.1	78.8	139	154.2	148.1	110	158	149
にんじん	5,207	85.9	85.3	168	160.3	115.9	155	179	171
はくさい	5,950	91.0	85.9	62	104.4	87.5	65	61	59
キャベツ類	16,508	95.3	99.7	78	109.8	97.2	84	81	70
ほうれんそう	791	82.3	85.8	637	113.8	104.6	551	695	670
ねぎ	3,234	91.8	91.7	367	116.1	98.5	378	391	336
レタス類	9,603	105.2	103.9	107	80.1	76.5	107	102	111
きゅうり	6,750	82.5	93.5	275	135.7	92.6	259	302	261
なす	3,387	95.9	98.9	323	106.9	87.0	309	345	315
トムト	6,971	87.1	89.1	329	102.4	103.6	288	340	366
ピーマン	1,970	90.2	100.6	417	119.5	92.7	356	440	451
さといも	147	91.9	93.2	339	81.8	74.3	383	322	322
ばれいしょ	4,265	86.5	83.8	98	70.0	59.1	96	94	102
たまねぎ	7,543	77.9	80.5	163	139.4	153.0	179	155	158

資料:東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1:平年比は過去5カ年平均との比較。

注2:豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんが入荷減から中旬以降 価格を上げ、安めに推移した前年を5割以上 上回り、平年を5割近く上回った(図2)。

葉茎菜類は、レタス類の価格が、やや安め に推移した前年を2割ほど下回り、平年を2 割以上下回った(図3)。

果菜類は、トマトが中旬以降に価格を上げ、 前年をわずかに上回り、平年をやや上回った (図4)。 土物類は、たまねぎが一時の高値からは落ち着いたものの、引き続き高値基調が続き、高めに推移した前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

図3 レタス類の入荷量と卸売価格の推移

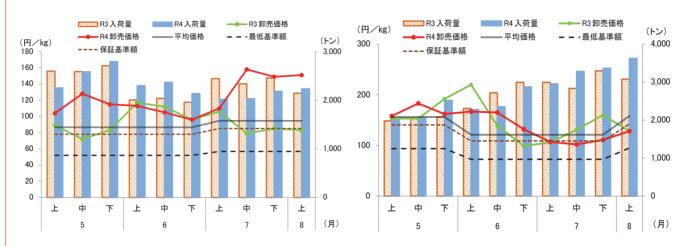
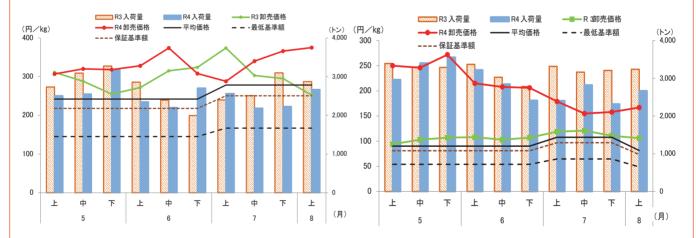


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料:東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、 関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業(以下「事業」という)における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額(出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額)を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向(東京都中央卸売市場)

业 エロロ		7001#8 555
類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産、青森産中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、曇天の影響により肥大遅れから生育はやや遅延。青森産の作付けも前年並みで、生育はおおむね順調であったが、5月の高温・乾燥の影響でやや肥大不足で、軟腐病の発生が散見された。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は入荷減から中旬以降価格を上げ、安めに推移した前年を5割以上上回り、平年を5割近く上回った。
	にんじん	青森産を中心に北海道産の入荷があった。青森産の作付面積は前年をやや下回り、5月の高温・乾燥による発芽不良がみられ、一部まき直しも散見される。北海道産の作付けは微減で、一部地域で低温の影響による生育遅れがみられるが、おおむね順調。総入荷量は平年並みであった前年を1割以上下回った。 価格は不足感から月間を通して堅調な動きとなり、大幅に安めに推移した前年を6割ほど上回り、平年を1割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、梅雨明け以降の高温・干ばつの影響で生育が遅延していたが、7月に入ってからの適度な降雨で回復傾向。総入荷量はやや少なかった前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。 価格は気温上昇での需要減退と加工需要の落ち着きから安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。
	キャベツ類	群馬産を中心に岩手産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、5月の凍霜害の影響は軽微で、天候の回復により生育は順調。岩手産も作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。総入荷量はやや多かった前年をやや下回り、平年並みとなった。価格は安めに推移した前年を1割近く上回ったものの、平年をわずかに下回った。
	ほうれんそう	群馬産、栃木産を中心に関東産の入荷となった。茨城産の作付けは、こまつなの作付減に伴い増加。その他地域の作付面積は前年並み。関東産の高冷地中心となるが、6月下旬の高温から7月の曇雨天と降雨により、生育遅れと品質のばらつきが散見された。気温の上昇で平坦地の品質は著しく低下している。総入荷量はやや多かった前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。 価格は中旬以降高冷地中心となって価格を上げ、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。
	ねぎ	茨城産の夏ねぎを中心に千葉産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、 生育はおおむね順調であるが天候不順での病害、品質低下が散見された。千葉産の作 付けも前年並みで、生育はおおむね順調も気温変化が大きく抽苔が例年より多い。後 続の東北産、北海道産は、7月に入ってからの降雨や高温の影響で病虫害や生育停滞 が散見され、全体に遅れが目立つ。総入荷量は前年、平年ともに1割近く下回った。 価格は給食需要がなくなった下旬に向けて価格を下げ、安めに推移した前年を1割以 上上回ったものの、平年をわずかに下回った。
	レタス類	長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、梅雨明けの高温・干ばつの影響により生育停滞がみられたものの、7月の適度な降雨で回復した。群馬産の作付面積は前年並みで、急激な気温の上昇での生理障害、軟腐病の発生が見られた。総入荷量はやや少なかった前年をやや上回り、平年もやや上回った。価格はやや安めに推移した前年を2割ほど下回り、平年を2割以上下回った。
果菜類	きゅうり	福島産を中心に岩手産など東北産中心の入荷となった。各産地の作付面積は前年並みだが、岩手産は前年を下回る。福島産は6月上旬の低温・曇雨天により1週間ほどの遅れ。中旬以降の高温・干ばつにより芯焼けや草勢低下が見られた。病虫害も多く、曲がり果も多い。各産地とも程度の差はあるものの、概して全体に遅れが目立つ。総入荷量は多かった前年を2割近く下回り、平年を1割近く下回った。 価格は大幅に安めに推移した前年を3割以上上回ったものの、平年を1割近く下回った。
	ts t	群馬産を中心に栃木産など関東産中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みだが、栃木産は前年をやや下回る。各産地とも生育は、低温での遅れから気温の上昇によって回復しておおむね順調。虫害がやや散見された。総入荷量はやや多かった前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。 価格は安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上下回った。
	F∆F	北海道産を中心に岩手産など東北産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが一部地域で落花や尻腐れが散見された。東北各産地の作付面積は前年並みであるが、福島産のみ前年をやや下回る。生育はおおむね順調も、一部産地で6月の低温の影響による生育遅れ、病害が散見された。また6月下旬から7月上旬の急激な気温上昇で落花、尻腐れが散見された。総入荷量は多かった前年を1割以上下回り、平年を1割強下回った。 価格は中旬以降に価格を上げ、前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。

	ピーマン	茨城産を中心に岩手産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は若 干遅れ気味もおおむね順調。岩手産の作付けも前年並みで、6月上旬の低温の影響で 露地作の生育がやや停滞。総入荷量は多かった前年を1割ほど下回り、平年をわずかに 上回った。 価格は中旬以降、東北産の増量に伴い上昇し、安めに推移した前年を2割近く上回 ったものの、平年をかなりの程度下回った。
土物類	さといも	鹿児島産を中心に宮崎産の入荷があった。作付面積は前年並みで、曇雨天の影響により掘り取りが遅延していたが、天候の回復に伴い一気に進みはじめた。中国産の輸入は前年を2割以上下回った。総入荷量は前年を1割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は安めに推移した前年を2割近く下回り、平年を2割以上下回った。
	ばれいしょ	茨城産を中心に静岡産、長崎産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、種芋不足の懸念があるも、玉伸びもよく順調。静岡産の作付けも前年並みで、成育初期で低温・干ばつの影響を受けていたが、その後の降雨と気温の回復で順調。長崎産の作付面積は前年並みで、小玉傾向から肥大も回復したが、一部病害が散見された。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、長期にわたる高値での動きの鈍化に加え、気温の上昇での需要減退から、安めに推移した前年を3割下回り、平年を4割強下回った。
	たまねぎ	兵庫産、佐賀産中心の入荷となった。兵庫産の作付けは前年並みで、目立った病虫害はなくおおむね順調で収穫も終了。適度な降雨と気温の上昇で初期の肥大不足も解消した。佐賀産の作付けは前年をやや下回り、生育はやや遅れて平年より小玉傾向であったが、品質も玉締りもよく良好。病虫害の発生が散見されるが軽微。中国産の輸入は前年を1割近く上回っている。総入荷量はやや多かった前年を2割以上下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は一時の高値からは落ち着いたものの、引き続き高値基調が続き、高めに推移した前年を4割近く上回り、平年を5割以上上回った。

(執筆者:東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

7月の大阪市中央卸売市場における野菜の 入荷は、入荷量は3万5599トン、前年同月比 88.9%、価格は1キログラム当たり225円、 同111.9%となった。(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量	前年比	平年比	価格	前年比	平年比	価格	(円/kg) 0	D推移
	(t)	(%)	(%)	(円/kg)	(%)	(%)	上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,599	88.9	93.4	225	111.9	99.9	221	228	226
だいこん	2,432	80.7	80.3	131	147.2	143.8	111	135	145
にんじん	2,040	92.8	91.4	174	172.3	118.5	153	188	184
はくさい	2,822	94.2	101.2	62	105.1	84.3	66	62	60
キャベツ類	5,177	86.8	97.0	86	117.8	106.5	96	88	77
ほうれんそう	320	71.9	79.1	731	115.7	107.7	682	781	735
ねぎ	584	102.0	102.1	477	116.6	104.4	472	518	451
レタス類	2,399	108.5	99.9	110	80.9	80.4	109	106	114
きゅうり	1,840	92.5	108.0	263	131.5	90.2	233	297	256
なす	998	91.2	101.7	271	102.3	86.5	248	272	293
トムト	2,074	88.2	91.0	330	100.3	102.7	314	330	342
ピーマン	548	91.2	93.0	352	111.7	88.9	306	375	369
さといも	33	82.9	72.1	350	81.2	78.6	391	325	338
ばれいしょ	1,728	73.0	77.7	99	92.5	57.5	76	97	119
たまねぎ	3,574	74.9	76.4	159	145.9	158.5	179	146	155

資料:農林水産省「青果物卸売市場調査」 注1:平年比は過去5カ年平均との比較。

注2:大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心に青森産や岐阜産などの入荷があった。北海道産は旬を追うごとに入荷増量となるも、入荷量は少なく月間では前年をかなり下回る入荷量にとどまった。他産地も入荷量は少なく、月間全体でも前年、平年とも大幅に下回った。 絶対量不足から価格は高値推移となり、旬を追うごとに上伸していった。下旬には前年の1.5倍を超える価格となり、月間でも前年、平年とも大幅に上回った。
	EAUA	月の前半は和歌山産が主体となり、中旬以降は青森産と北海道産が主体となる入荷であった。和歌山産は残量が多く潤沢な入荷を続け前年を上回ったが、青森産と北海道産は小玉傾向で入荷が不安定であった。全体では旬を追うごとに入荷減量となり、月間でも前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は高値傾向から中旬に産地が移行して高騰した。月間全体では前年の1.7倍の価格になり、平年を大幅に上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産を中心とする入荷であった。初期生育期の干ばつの影響で生育が遅れていたものが、適度な降雨により回復傾向となり、旬を追うごとに入荷増量となった。高温から品質低下品が多く、量販店も加工筋も共に動きは鈍く販売には苦戦した。月間では前年をやや下回り、平年はわずかに上回った。 価格は不足感から上旬にはやや高めであったが、入荷増量と低品質、引合いの弱さから旬を追うごとに下落した。月間では前年をやや上回り、平年をかなり大きく下回った。
	キャベツ類	主力の群馬産と長野産の入荷であった。群馬産は旬を追うごとに入荷増量傾向でありながら全旬とも量は少なく、月間でも前年を下回る入荷量にとどまった。長野産は中旬に入荷増量となったが下旬には減量となり、月間では前年を若干下回った。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。降雨と気温高から品質低下品が多く、価格は旬を追うごとに下落傾向ではあったが、8玉サイズ中心の入荷で全体としては入荷量の大きな増減もなかったことから、堅調な価格での推移となった。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ほうれんそう	岐阜産を中心とする入荷であった。高温による生育不良から入荷量は少なく、また不安定であった。月間では前年、平年とも大幅に下回った。 絶対量不足から高値推移となり、入荷減量となった中旬に高騰した。月間でも前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ねぎ(白ねぎ)	主力の鳥取産と茨城産の入荷に加え、下旬には後続の北海道産や長野産の入荷が始まった。各産地とも安定した出荷で月間では前年並となった。 価格も大きな変動はなく安定した価格が続き、月間では前年を若干上回った。
	ねぎ(青ねぎ)	徳島産を中心として高知産、香川産や近隣の奈良産、大阪産などの入荷もあった。 各産地とも高温と干ばつの影響から生育不良で出荷量が少なく、主力の徳島産は前年を 大きく下回り、月間全体でも前年をかなり下回った。一方で細ねぎは高知産や静岡産が 主体となり、安定した平年並の入荷が続いた。青ねぎ全体としては前年をかなり下回っ た。 末端の荷動きは鈍かったものの、絶対量不足から単価高が続き、月間では前年を大 幅に上回った。細ねぎ価格は、青ねぎの代替としての薬味用需要の増加を背景に、堅 調に推移した。青ねぎ全体では前年を大幅に上回る価格となった。
	レタス類	長野産の入荷があり、干ばつの影響で産地出荷量が少ない中でも旬を追うごとに微増傾向となった。調整事業から入荷が少なかった前年並みの入荷量となった。サニーレタスも長野産の入荷で、レタス同様に干ばつの影響から少ない状況が続いた。リーフレタスも長野産中心で、順調な入荷で旬を追うごとに微増傾向であったが、加工筋の動きは悪く販売には苦戦した。レタス類全体では、月間で前年をかなりの程度上回り、平年並みであった。 入荷量が伸び悩む中でも売れ行きは悪く、特に加工業務関係からの需要が少なく、価格は前年、平年とも大幅に下回った。

果菜類	きゅうり	福島産を中心に長野産などの入荷があった。月の前半は順調な出荷であったが、後半は高温の影響で入荷減量となった。宮崎産や高知産の春産地は前半で終了となり、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は不足感から中旬以降に高値となった。月間では安値だった前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度下回った。
	なす	千両系は京都産、奈良産、大阪産など主力の各産地からの入荷があった。長なすは 愛媛産が主体となった。各産地とも中旬に曇天や降雨が続いて入荷量減少となった。下 旬には回復し、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。 入荷量が少ない中でも引き合いは弱く、前月からの安値の影響もあり安値推移となっ た。旬を追うごとに上伸傾向ではあったが、月間では前年をわずかに上回り、平年をか なり大きく下回った。
	1	岐阜産を中心に、愛知産の残量入荷と、後続の岡山産や愛媛産などの入荷もあった。 九州産地が前月の出荷量が多く前進したことにより7月の入荷量は少なく、他産地は6月 の天候不順や7月に入ってからの高温(特に夜温が高かった)により小玉傾向となって 入荷減量となった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回 った。 価格は安定した前年並で推移し、平年をわずかに上回った。
	ピーマン	宮崎産を中心に愛媛産や大分産、長野産などの入荷があった。東北産地の出遅れから中旬に入荷減量となり、月間全体でも前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は不足感から中旬に高値となり下旬にわずかに低下したが、月間では前年をかなり大きく上回り、平年をかなり大きく下回った。
土物類	さといも	鹿児島産を中心に、下旬から宮崎産の入荷も始まった。宮崎産はLサイズ中心の平年通りの作ではあったものの、入荷遅れで前年の半分以下の入荷量となった。中国産の入荷もあったが前年の半量程度であった。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。さといも自体の需要が少なく、加工業務筋からの引き合いも弱く、入荷量が少ない中でも安値推移となり、前年、平年とも大幅に下回った。
	ばれいしょ	丸芋は茨城産を中心として長崎産の残量入荷もあった。下旬には北海道産の入荷も始まった。茨城産は順調で旬を追うごとに入荷増量となり、月間では前年の1.5倍以上となった。長崎産は切り上がりが早く前年の半分以下の入荷量であった。メークインは長崎産の残量入荷が主体となり、千葉産や茨城産の入荷もあった。関東産地が降雨など天候不順の影響で出荷が出遅れ、茨城産は前年の3割程度の入荷量にとどまった。ばれいしょ全体でも月間全体で前年、平年とも大幅に下回った。 価格は前月からの安値の影響が残り、気温高で引き合いも弱く、旬を追うごとに上昇傾向ではあったが、月間では安かった前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。
	たまねぎ	兵庫産を中心とする入荷であった。前月まで引き合いが強かったため前進出荷が続き、 出荷調整をしながらの入荷となった。全旬とも入荷量は少なく、月間でも前年、平年と も大幅に下回った。 価格は前月までの高値の影響が残り、上旬までは高騰、中旬以降に落ち着きを見せ つつも不足感から下げ止まり、月間では前年を大幅に上回り、平年の1.5倍以上となった。

(執筆者:東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4)首都圏の需要を中心とした9月の見 通し

今年は梅雨明けが早く全国的に6月は高温 に見舞われ、7月に入って一旦気温が下がり、 8月に入り再び全国的に猛暑となった。果菜 類の農家は非常に難しかったと思われる。梅 雨がないとされる北海道だが、6月は曇天多 雨の日が多かった。夏秋野菜と高原野菜はシ

ーズンが終わってみれば不作年の結果となっ ていると予測される。農家が最善を尽くして 出荷しても、市場到着後にダメージ(傷み) の発生が多くなることも心配される。市場で は一般的に「品物が悪いから高値になる」と いわれる。8月から9月にかけても、想定し た品質でない場合が多いと予想され、出回り 量が少なく高値の展開が続くと予想している。



根菜類

だいこんは、北海道産(道央ようてい)が6月下旬から始まったが、計画より少なめの出荷となっている。8月も6月に播種できなかった影響で少なめの出荷が続くが、9月に入り例年並に回復してくると予想される。同産(道東標茶)は7月21日から始まったが、例年の80%程度の出荷となっている。天候不順によりやや小ぶりの仕上がりとなっている。また、抽苔の発生や9月出荷物の播種が完全でなく、平年並に回復することなくシーズンを終えると予想している。シーズン後半は2Lサイズ中心のLサイズ出荷と予想される。

にんじんは、北海道産(道央ようてい)は8月5日から選果開始と予想される。現状は肥大不足で、出荷始まりはやや小ぶりのMサイズ中心と予想される。出荷は11月の初め頃まで、ピークのない平準ペースの出荷と予想される。同産(道東斜里)は7月25日から始まり、天候は問題なく計画通りに出荷ができている。干ばつで少なかった前年比の120~130%の出荷のペースとなっている。11月の初め頃まで平準出荷で、大きなピークはないと予想される。品種は「晩抽天翔」。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産の7月までの実績は前年の100%で、平年並の出荷ペースである。 長雨や日照不足の時期もあったが、特に問題はない。盆明けから9月は最大のピークとなり、Lサイズ中心の出荷と予想される。岩手産は長雨や曇天、高温の影響で出荷は少な目になってきた。巻きが甘くなって軽く、規格に合うものが少なくなっている。ただ、日数が経ち過ぎると腐れになり易い。8月末頃か9月の初め頃には平年並に回復すると予想している。

はくさいは、長野産の圃場は開田高原と小

木曽地区にあるが、降雨や高温による影響もなく順調である。ピークは8月末から9月上旬と予想している。作付けはやや減少している。

ほうれんそうは、群馬産は高温により細く 仕上がって出荷数量は減少しているが、例年 と同様である。9月中下旬から増えてきて、 10月に入って露地へ切り替わると予想され る。作付けは前年並であり、雨によるダメー ジの報告はない。栃木産は、6月の猛暑が影 響して平年よりも少なめの出荷となっている。 7月下旬に土砂降りの雨が3日間続き、雨除 けハウスの周辺に雨水が溜まった。圃場は標 高800~1200メートル地帯にあって安定した 出荷は期待できるが、この後の晴天で病気の 発生も心配される。8~9月も平年をやや下 回る出荷と予想される。岐阜産は8月初めの 段階では例年と同様に減っているが、高温で より鈍くなっている。9月中下旬から再び増 えてくると予想している。

ねぎは、茨城産の夏ねぎは現在も圃場に残 っており、品質も良く9~10月は少なかった 前年を上回る出荷と予想している。青森産は、 天候が悪く現状収穫作業は進んでいない。盆 明けから連日出荷され、9月が最大のピーク と予想される。現状は品種特性もあるが、6 ~7月の長雨と、晴天の日の異常高温により、 市場到着後にダメージが発生している。現時 点では天候の回復が待たれるが、9月は平年 並に戻ると予想している。北海道産は7月10 日過ぎから始まったが、定植を早めたため例 年より若干早まっている。5~6月の函館地 方は干ばつで、7月に入り雨が多くなって肥 り始めた。生育は順調で、盆明けから9月上 旬にピークが来て、その後9月下旬から10月 上旬に再度緩やかなピークが来ると予想され る。

レタスは、長野産は7月末から8月初めにかけて3日間ほど降雨があり、多くの圃場で影響を受けた。出荷に影響が出てくるのは8月下旬から9月上旬と予想している。それでも9月は平年をやや下回る出荷と予想される。群馬産の現状は高温により出荷は減っている。9月に入り中下旬にやや増えるものの、10月の3週目に切り上がると予想される。7~8

月の降雨の影響は心配ない。茨城産は8月1 日から播種作業が開始し、9月下旬からの出 荷と予想される。本格的には10月5日頃から であり、作付けは微減を予想している。

果菜類



きゅうりは、福島産の7月までの出荷実績 は前進して多かった前年の90%程度である が、平年並みの状況である。猛暑が続いてい るが、現状までは木の勢いは落ちていない。 9月には木に疲れが出ることも想定されるが、 農家の肥培管理により10月上旬までの出荷と 予想される。群馬産の抑制物は9月初めから 出荷が始まるが、出揃うのは9月20日頃から と予想される。盆前後に購入苗を定植するが、 面積は例年と変わらない。栃木産は夕立に見 舞われているが、特別問題なく生育は順調で ある。最大のピークは盆前後で、9月には減 りながら推移すると予想される。9月は平年 並みの出荷を予想している。

トマトは、北海道産の現状までの出荷実績 は曇天が続いたことが影響し、前年の87%と 少なかった。ピークは盆前後と予想している。 Mサイズ24玉入りが中心で、9月の完全な回 復を期待している。青森産の現状は出荷のピ ークに入っている。この後は6月初旬の長雨 で花が飛んだ影響で、盆前に少なくなると予 想される。現状の花付きも決して良くなく、 8月下旬から9月前半にかけて出荷が少な目 になると予想される。生産者の減少により作 付けも前年の90%程度で、9月の出荷は前年 を下回ると予想される。群馬産は現在、実は 付いているが、色回りが遅く少なめの出荷と なっている。6月の猛暑の時期に花落ちした ため盆明け頃に一旦減ると予想される。9月 に入って回復し、下旬には減り始めて10月に は切り上がると予想される。

ミニトマトは、北海道産は気象の影響なく 生育順調で、例年通り盆前後にピークが来る と予想している。品種は「キャロル10」で、 切り上がりの10月中旬に向けて徐々に減少す るが、9月は量的に潤沢と予想される。

ピーマンは、福島産は7月18日までは前年

の80%程度だったが、7月下旬後半になって 前年の130%と急増した。このペースは8月 の盆前まで続き、下旬も量的にはまとまると 予想される。9月10日頃には再びピークとな って潤沢なペースが続くと予想される。全体 の70%が露地物で残りはトンネル物などであ り、雨の被害はなく、平年の出荷と予想される。 岩手産の露地物は7月下旬後半にピークを迎 え、梅雨明けの遅れが影響し例年より5~6 日の遅れになっている。8月に入りやや急減 し、盆前後に再び増えると予想される。9月 は8月よりも減り、ほぼ9月いっぱいの出荷 と予想される。ハウス物は盆頃にやや多くな るが、9月も問題なく通常のペースで出荷さ れると予想される。8~9月は前年と比べや や減の出荷を予想している。

土物類



さといもは、愛媛産の「女早生」は例年ど おり9月10日前後から出荷が始まると予想し ている。6月の高温・干ばつで潅水した圃場 の物にヤケの被害が見られている。圃場によ るばらつきが大きく、作柄は悪い見込みであ る。年明け3月までの出荷予定ある。静岡産 の石川小芋は例年通りであれば、8月20日過 ぎから始まり11月までと予想される。九州各 県産は、やや小ぶりの仕上がりと予想してい る。

ばれいしょは、北海道産(十勝芽室)は現在、 「メークイン」のマルチなどで被覆した物の収 穫は始まっており、10~14日程度風乾した後 に出荷が始まる。盆前の8月10日前後に市場 に到着すると予想している。農家は小麦の収 穫作業も行っていて忙しく、本格的に増える のは8月下旬以降と予想される。 L サイズ中 心で収穫量は平年を若干上回る見込みである。 同産(道央ようてい)の「男爵」の出荷は盆 明けから始まるが、おおむね平年並みと予想 されている。9~11月をピークに、Lサイズ 中心の2Lの出荷と予想される。

たまねぎは、北海道産は7月末の段階では 若干始まっているが、本格的な収穫の開始は 8月に入ってからとみられる。本年産は気象 の被害もなく順調で、平年作を予想している。 玉の肥大も平年並みである。



その他

ブロッコリーは、北海道産(道東女満別) の現状は端境期が終わったところであるが、 気候の影響で出荷がかなり偏っている。出荷 始まりは遅れたが、7月上中旬に一気に出て、 低温により下旬に入って少なくなり、下旬後 半から天気が安定して、8月に入って再び増 えてようやく平準的な出荷に戻ると予想され る。10月いっぱいの出荷となり、9月は平年 並の出荷を予想している。同産(十勝木野)は、 7月下旬に少なくなり、8月に入り再び増え て9月いっぱいとなるが、7月ほどは多くな い見込み。大雨による圃場廃棄も一部あった が、トータルでは平年作と予想している。長 野産は8月も出荷が続くが、本格的に増え始 めるのが9月中旬からで、当面のピークは9 月下旬と予想している。標高1200メートルの 原村は、降雨の影響で一部傷みや生理障害も 発生している。8~9月は前年並みかやや少 なめを予想している。

かんしょは、徳島産の鳴門金時は7月から 例年並みに始まっているが、掘り取りしなが らの出荷で10月まで現状維持の出荷ペースと 予想される。現在のところ生育は順調で、豊 作傾向を予想している。石川産は例年どおり 8月23日から共撰が開始されると予想され る。現状は試し掘り前で予断を許さないが、 過去の経験から判断すると5月定植の前半物 が大きく後半物が期待したほど肥大しないと いった展開も想定される。9月の出荷は活発 で、10月は一旦減る見込みである。

ごぼうは、群馬産の他に青森産の新ごぼう も始まると予想される。冬季の天候不順が春 掘りを難しくさせるため、この秋の段階から 活発な出荷になると予想される。各産地とも 生育は問題なく、平年を上回る出荷が予想さ れる。

れんこんは、茨城産が9月に入り新れんこ んに切り替わる。今年は梅雨明けが早く猛暑 になったことから、圃場によりばらつきが大

きいとされ、現状では作況の判断が難しい。 9~10月と徐々に増えて、その後に豊凶の判 断ができるであろう。

えだまめは、山形産は8月20日頃から9月 が出荷のピークと予想される。9月の出荷は 晩生品種であるが、作付けの増反で前年の 110%程度の出荷と予想される。青森産は7 月までの極早生物は6月の低温とその後の極 端な高温の影響で半作だった。8月の早生に なって回復し、9月の晩生は前年並と予想さ れる。作付面積は生産者の高齢化により10年 前の半分と大幅に減っている。

いんげんは、福島産(ふくしま未来)の夏 秋ものは6月下旬から始まり、8月に入り本 格化してくると予想され、涼しくなる9~10 月がピークである。品種は「いちず」で、作 付けは前年並みである。同産(会津)が増え てくるのは9月に入ってからで、ピークは中 下旬と予想される。 平莢の 「ビックリジャンボー と丸莢の「かもがわ」などが半々である。今 のところ順調であるが、高温により害虫の発 生が懸念される。9月は前年並の出荷を予想 している。

とうもろこしは、北海道産(十勝芽室)の 出荷のピークは盆明けから9月上旬で、量的 にまとまるのは15日頃までと予想される。6 月の天候不順で発芽が悪く小ぶりであること から、作付けは増えているが出荷は前年を下 回ると予想される。同産(道央ようてい)は 現在始まっているが、やや小ぶりの仕上がり となっている。ピークは盆明けから9月10日 頃までで、作付けは前年比微減の95%前後で ある。

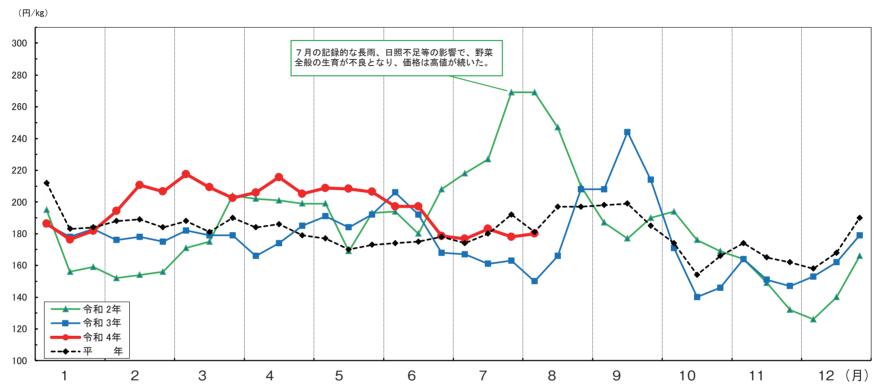
にんにくは、青森産の現状は収穫作業が終 了してセンチュウ対策を施しており、市場出 荷は8月末頃から開始すると予想される。収 穫量は前年の110%程度で、平年比でもやや 多い。全般に大振りの仕上がりであるが、外 観はやや悪い。

(執筆者:千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

塭

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移(東京都中央卸売市場)



(単位:円/kg)

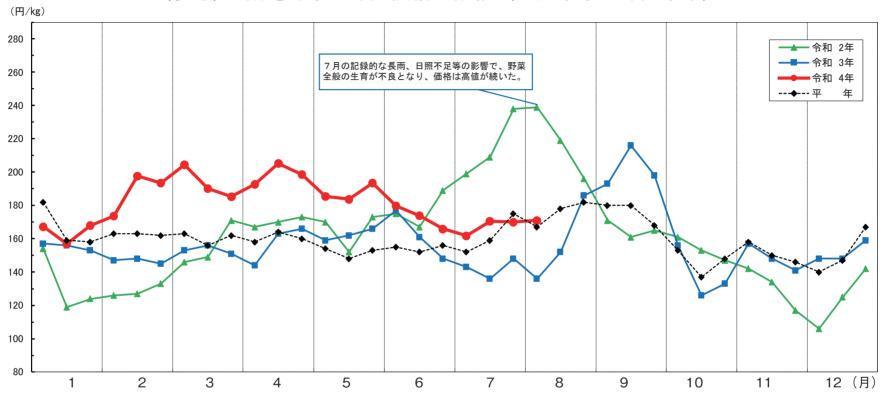
	1月				2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月		1	12月	
	上旬	中旬	下旬																																	
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	180														
平 年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190

資料:農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1:平年とは、過去5力年(平成29年~令和3年)の旬別価格の平均値である。

注2:豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移(大阪市中央卸売市場)



(単位:円/kg)

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月				11月				
	上旬	中旬	下旬																																	
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171														
平 年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167

資料:農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1:平年とは、過去5カ年(平成29年~令和3年)の旬別価格の平均値である。

注2:大阪本場および大阪東部市場のデータである。